

アウグスティヌスは、プラトンのキリスト教、トマスアキナスは、アリストテレス的キリスト教

アウグスティヌス（354-430）とトマス・アキナス（1225-1274）は、ともにキリスト教思想史の二大巨峰として知られていますが、それぞれが依拠した古代ギリシア哲学の流れが異なることから「アウグスティヌスはプラトンのキリスト教」「トマス・アキナスはアリストテレス的キリスト教」としばしば対比されます。以下、簡単にその背景と理由を整理します。

1. アウグスティヌスとプラトンの伝統

1. 新プラトン主義からの影響

アウグスティヌスは若い頃、マニ教や懐疑主義を経て、新プラトン主義の哲学者プロティノス（Plotinus, 205-270頃）の思想に深く感化を受けました。プラトン自身の対話篇を直接読んだわけではなかったものの、プロティノスを通じてプラトン哲学（プラトン主義）を知ることになります。

- **神とイデアの近似:** プラトンの「イデア」の概念は、アウグスティヌスの中では「神の内なる永遠の理型 (ideae principales)」として理解されました。
- **上昇と回帰の構造:** 新プラトン主義では、人間は神（善）へと上昇する内的な構造を持つとされます。アウグスティヌスも、人間の内面を辿りながら神を見出すという内省的・霊魂的な方向性を重視しました（『告白』に顕著）。

2. 内面的探求と「真理は内にある」

アウグスティヌスの有名な言葉「自分自身のうちに帰れ、真理は人間の内にある (In interiore homine habitat veritas)」は、プラトンの伝統（とりわけ新プラトン主義）の“可視的な世界の背後にある真の実在へ目を向けよ”という発想と響き合います。

- プラトンの伝統では、感覚世界よりも「知性で捉えられる世界」（イデア界）がより高次の実在とみなされます。アウグスティヌスは、これをキリスト教の神学に融合させ、神は最も高次の存在であり、知的直観を通じて魂は神へと向かう、という構図を築き上げました。

3. 時間・永遠論とプラトンの思考

プラトンではイデア界が永遠不変の実在として位置づけられますが、アウグスティヌスの神も永遠不変とされ、一方で被造物（この世界）は時間の中で移ろう存在とされます。こうした“永遠と時間”の対比構造もプラトンの二元論の枠組みが反映されているといえます。

2. トマス・アキナスとアリストテレス的伝統

1. アリストテレス哲学の再発見

トマス・アキナスの時代は、12世紀頃からアリストテレスの著作（とアラビア哲学者による注釈）がヨーロッパに再紹介され、大きな知的刺激となりました。特に自然学・形而上学・倫理学など、包括的な学問体系をもつアリストテレスは、スコラ哲学（中世神学）の基盤として受容されていきます。

- 13世紀パリ大学でのアリストテレス研究の発展はトマスの思想形成に大きく寄与しました。

2. 理性と信仰の調和

アリストテレスは、感覚経験から得られる個別的な事物を知性が抽象することによって「本質」を捉えるという「知の形成過程（認識論）」を重視します。トマスはこうしたアリストテレス的な認識論を神学と統合し、理性（哲学）と信仰（神学）を階層的に整理しつつ、両者を調和させようとした。

- **五つの道（五証明）**：自然界から神の存在を理性的に証明しようとする試み（『神学大全』第一部）も、アリストテレス的な「経験＝感覚から出発して第一原因へと遡る」アプローチが背景にあります。

3. 実体と本質・存在の区別

トマスの形而上学では、アリストテレスの「質料（ヒュレー）と形相（エイドス）」の理論や、「本質と存在」の区別が重要です。特に、

- **被造物**：「本質(essentia)」と「存在(esse)」が区別され、存在は神によって与えられる。
- **神**：本質と存在が同一とされる唯一の存在。
このようにアリストテレスの形而上学をさらにキリスト教的存在論に深化させています。

4. 徳と幸福論

トマスの倫理思想においても、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の受容は顕著です。人間は善を志向する理性的動物であり、徳（アレテー/virtus）を形成することによって自然本性が完成される、とされます。これに加えてキリスト教的な“神から与えられる恩寵（超自然的徳）”の概念を統合することで、自然と超自然、理性と信仰を包括する倫理体系を打ち立てました。

3. プラトンのキリスト教とアリストテレス的キリスト教

総じて、アウグスティヌスは人間の内面と永遠・神との関係性に焦点を当て、「この可視世界を超えたところにある真理・存在」を強調しました。これはプラトン／新プラトン主義のイデア的・内面的な志向と響きあいます。

一方、トマス・アクィナスは、自然世界と理性の積極的な意義を認め、「感覚経験を通じて得た知性の働き」によって神の存在や世界の秩序を理解できると考えました。これはアリストテレス的な“個物の観察から普遍を抽象し、さらに第一原因へと遡る”という哲学的態度と親和性が高いと言えます。

もちろん、アウグスティヌスも理性や現実世界を否定したわけではなく、トマスも霊的実在や超自然的恩寵を排除したわけではありません。ただ、どちらを強調し、どのような哲学的枠組みを借りたかの違いが、「プラトンのキリスト教」「アリストテレス的キリスト教」という呼称として端的に表現されているのです。

まとめ

- **アウグスティヌス**
 - プラトン・新プラトン主義を媒介として、神・魂・永遠・内面性を強調。
 - 「真理は内にある」という内省的方向と、時空を超える絶対者としての神の対比構造が顕著。
- **トマス・アクィナス**
 - アリストテレス哲学をスコラ神学の基盤に据え、感覚経験を通じた理性の働き（抽象化）を重視。

- 自然と恩寵（超自然）の秩序を包括し、理性と信仰の調和的關係を体系化。

このように、同じキリスト教思想家でありながら、それぞれが主として継承したギリシア哲学の違いが、後世において「プラトンのキリスト教」「アリストテレス的キリスト教」という対比的理解を生み出しているのです。